
イミテシオ・カンタリベ

月並

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イミテシオ・カンタリベ

【Nコード】

N7789F

【作者名】

月並

【あらすじ】

科学が世界を覆い、現実教と宗教は混濁と分離を繰り返していた。そんな世界に一石を投じた、狂った賢者の物語。

終わりより前の全ての始まり（前書き）

今後連載予定のイネスタ・カンタリベのバックストーリーです。
しばらくは賢者と助手の話しをパラパラと綴っていきます。時間軸
もバラバラなので、本をバラバラに引っぺがして、散らばったペー
ジを拾っていくようなつもりで読んで頂ければと思います。

終わりより前の全ての始まり

それは科学が崇拝され、幻想伝承が廃れ始めた頃の話。

科学とは、つまりは人の知恵。起源はおそらく人類の誕生とほぼ同時、宗教と切り離されて明確に名が付いたのは大よそ400年前。倫理の基盤を持たない最悪のカルト教は、世界中へと浸透し、現実とうまく調和して世界を支配し始めていた。

数億と殺し、地平を腐らせ、そのくせ彼の教えには正義も悪もない。それも当然、科学はその足を法則に置く。そこに正しい、間違っているというものは存在しない。紙に火を当てれば燃焼する、リングを放り投げれば地面に落ちる。それらの決まりの本質に善悪はない。それどころか、快や不快すらも無い。

なんとも不気味で、薄気味悪い。

そして、科学を使い使われるのは彼の有名な人類諸君。

彼らは喜び、彼らは悲しみ、哀れみ、恐れ、怒り、憎しみ、愛し、誇り、

故に彼らは科学を崇拝する。故に彼らは科学に盲執する。

それは素晴らしく倫理的で、それは素晴らしく道德的で、それは素晴らしく動物的で

それは素晴らしく高潔で純粹で劣悪で邪悪であつた。

自らの為、他者の為に人は抗い

自らの為、他者の為に人は争い

自らの為、他者の為に、そしてその果てに虚像の為にすら

それは科学が崇拝され、幻想伝承が廃れ始めた頃の物語。

「はあ……魔法、ですか」

ここが何処で今がどんな時代かわかって言ってるのかこの尼は、とても言いたげだった。眼鏡の男は半ば呆れ顔……いや、呆氣に取られて気の抜けた声を漏らす。

「そ、手から炎とか氷出したり、ドラゴンやバハムートを召喚したりするの。変身したり、空を飛んだりするの。そんな世界があれば素敵じゃない？」

「そりゃ、面白いかもしれないですけど。なんと言いますか、……正気ですか？」

男の問いは至極当然のものであった。絵本や宗教の中なら兎も角、この研究所という超絶リアルな空間において、魔法なんて言葉はジョークか褒め言葉以外では口にされ得ない。

「そりゃあ正気も正気、いや、狂気？　まあいいや、少なくとも私たちにとっては大差ないわ」

そうでしょ？　と彼女は首を傾げる。

「いや、そりゃそうですね。俺が言ってるのはそういうことじゃなくて、本気で可能だと思ってるのか？　てことです」

「無論よ、当然」

その自信はどこから出てくるのか。普段からこの気狂いの言動には驚かされてきたが、今回は今までを遥かに越えていた。

魔法、そんな言葉を彼女が口にするなんて、彼は今まで一度だっと思ってたことは無い。恐ろしいほどまでに現実主義で、寒気がするほどに無神論者なのだ。そんな彼女が、魔法という言葉を口にした。それはキリストが葡萄酒の瓶でパウロを撲殺するよりも信じ難いことであつた。

「と言うか、そんな趣味があつたんですか。試験管と顕微鏡に欲情しかないマッドサイエンティストだと思ってました」

「私は科学が好きなわけじゃないわ。遠くに行くの為に鍵が必要だったの」

「はあ、そりや意外だ」

それについては驚く必要は無い。男は彼女の在り様を認識し間違えた訳ではない。ただ、名前を付け間違えただけだ。

「それで、どうやってその魔法を実現させるつもりですか？ 仏舍利とか聖骸布なら幾らでもありますけど、どれも使えそうにありませんよ」

「あんなの役に立たないわ。あれを聖物たらしめてるのは人以外の何物でもないもの。麻薬の方がまだ現実的よ」

その言い振りから、彼女は現実的な方法で魔法を生み出すつもりであることを男は察した。

彼女のことだ、どうせきっちりと計画を立てた上、実行可能な段階にまで来ているのだろう。そうでなければ、彼女は決してそんなことを話したりはしない。そして彼女が話したということは、彼はその歴史的かもしれない瞬間に立ち会える権利を得たに等しい。

彼女とは異なる質ではあるが、彼も人並みの好奇心と逸脱した興味を持っている。心の内では呆れながらも、やはり彼女の次の言葉に期待していた。

「突然だけど問題、魔法についての格言で有名なものは何かしら」

「そりやあ、『高度に発達した科学は魔法と見分けがつかない』でしょ」

「そうそう、まさにそれよ」

その言葉と共に男を指差す。

「」

思わず絶句した。その言葉が衝撃的だったからではない、今までの彼女の発案からは想像できないほどに、それが低次元だったのだ。「……いや、わかりますよ？ 多分、俺の想像も当たってるはずですよ」

「でしょうね、わかんなかったら助手になんてしてないから」

男はおそらくはそれを聞いた誰よりも早く、彼女の意図を理解していた。

しかし腑に落ちない。普段なら、思わず驚きに声でも上げてしまいかねないというのに、わけのわからなかった数式が解けるように喚起が胸を燦るというのに、今回はあまりにも拍子抜けするものだった。要するに、彼女は磁石で像を浮かせるように魔法を模造しようと言っただけだ。

あまりにも現実じみている。第一、彼女が望むものは作ってはならない。

「幻想は未知が故に幻想、科学は現^{うつ}であるが故に科学。貴方の成果を人は魔法と呼ぶでしょう、しかし貴方はそうは呼べない。それは科学であり、現実だ」

それは変えられない事実である。手品師が人を騙すように、役者は常に現実に乗って夢を見せる。享受する側なら兎も角、送り手は常に現実には苛まれなければならない。

「そうとも限らないわ。何せ魔法よ、何だって出来て当然じゃない」
彼女は変わらず、ポーカーフェイスの中で笑みを湛える。

そんなものが可能なわけが無い。彼は何度と無く彼女の奇案にそう言ってきた。そしてそれが無知による疑いであることに、その数分後に思い知らされるのだ。それ故に彼は「在り得ない」とは口にはしない。彼女は考えているのだろう。役者でありながら幻想を教授する方法を。

「……一体、何をやらかすつもりですか？」

男とて、伊達に彼女と8年以上も付き合っていない。彼女の考え、行動、その他諸々が大よそ予想がついてしまっている。だからこそ恐ろしい。先ほどまで感じていた好奇心が灰色の不安に染まっていって薄気味悪さを感じながら、男は彼女の瞳を窺った。

「何時もと変わらないわ、やりたいことを只するの。違っただけ理想と手段だけ。……ああ、あと少しだけ規模が大きくなるわ」

「少し？」

男の頭の中で、その言葉が『破滅的』に置き換わる。彼女の頭の中の規模は仏教張りの極大と極小を凌駕している。彼女の少しとは、

手の平を阿摩羅ばかり震わせることに等しい。つまりは厄災である。
「もう準備は出来てるの、後は直後の動乱が全てを滅ぼさない程度にコントロールするだけ。そういう訳で、お願いしたことがあるんだけど、いいかしら？」

即答でOKサインを出す男。どの道こうなるのだから考える必要は無い、それよりも彼女の話の続きを聞きたかった。

「ありがとう、流石私の大事な助手。それじゃ、まずは一から話しましょうか。楽しみにしておきなさい、これは人じゃ耐え切れない大洪水かも知れないわよ」

相変わらずの無表情のような、今まで見たことも無いような笑みを見せて、彼女はそこから立ち去った。

「……………」

男は小さく息を吐く。

何となく、彼女の想い描く世界は予想できる。それはとても現実的で、どうしようもなく冷酷だった。それが現実すれば、彼は一体どうなってしまうのか…………いや、世界は一体どうなってしまうのか。

それは科学が崇拜され、幻想伝承が廃れ始めた頃の話。

それでも尚、幻想が世界を支配し、伝承が人を突き動かしていた頃の物語である。

まぬがれぬもの

一閃の光と共に、キィキィという断末魔が木魂し、真つ赤な泥水がケースに叩きつけられる。たちまちに内部の温度は灼熱となり、惨劇は一瞬でかき消されていった。それから光を失って数秒後、内側が溶解したケースだけがそこに残されていた。

その様子を、半ば放心状態で見つめる科学者とその助手。

「……うわ、グロ」

「参ったわね、上になんて言えば良いのかしら……」

少しずれた感想を口にし、二人は互いに顔を見合わせた。これで一体何度目なのだろう、彼らの研究室での殉職マウスは、これめでたく13匹を超えた。それは他と比べれば少ないのだろうが、実験と呼んでいいのかわからない。どちらかと言えば虐殺に近い失敗であり、あまりにも惨憺たるものであった。実は、今のところ無い。

更に言えば、このケースは結構値が張る。彼女からしてみれば、そっちの方が重大かもしれない。

「宇室くん。このことは、出来るだけ内密にしましょう」

「そうですね。下手したら動物愛護団体のデモ材料になりかねないですし」

「……まあ、放送禁止で効果は薄そうだけどね」

それは科学が崇拝され、幻想伝承が廃れ始めた頃の話。人の智は神をダルマにし、その四肢にすら手を伸ばそうとしていた。

幾らかの奇跡は実現し、今ではすっかり当たり前のことになって

しまった。

破壊も預言も愛も誇りも、今ではもうカルトの手中に。
あの偉大だった神が死んでも、世は全て事も無し
それは科学が崇拜され、幻想伝承が廃れ始めた頃の話。

科学者は小さく息を吐き、側にあつた机に腰を降ろした。

「なんともなるものね。少し頼んだらすぐに取り替えてくれるって」

「……でしょうね、彼らにとっては脅迫でしょうから」

「そんなつもりは無いんだけどね」

そう言つと、彼女は差し出されたコーヒーを受け取り、立ち上る香りに鼻を寄せた。彼女は味には興味は無いが、臭いはまた別の話である。安らぎが鼻から胸を抜けて腹部に落ち着く感覚に、科学者は恍惚とした表情を浮かべる。

「しかし、こんだけ失敗が続くと嫌になりますね。そろそろ次のステップに進む予定のはずなのに」

予定していた期限まであと17時間。焦燥するのには丁度良い、眼鏡の助手が時計を見る間隔が増えるのも当然のことであつた。

「良いんじゃない？ 勝手に私たちが決めたことだし、過ぎたら過ぎたらで無問題よ。それに、失敗が二桁なんて驚くことでも無いでしょう。有名な科学者達を見てみなさい」

「そりゃあ、わかりますけど……」

彼女の言い分はわかるが、半端な完璧主義の彼には易々と受け入れられる事ではなかつた。少なくとも、彼は失敗の繰り返しでスランプになりかけている。尤も、彼にとって信頼に足る彼女が居る限りは、そんなことは起こらないであろうが。

「とは言え、犠牲は少ない方がいいでしょうし、それなりに善処しましょう。マウスのお墓も造り飽きたし」

「お墓、ですか」

壁に画鋏で留められている紙に、「マウス」と書かれた文字の横に『正』の文字が二つ、Tが一つ書かれていた。これである。

汚染の可能性がある為、死体を地面に埋めるなんてことは出来ない。おかげでこんなものになってしまったらしいが、他にもやり方はあっただろうと男は思っていた。こんな墓なら、溝に捨てた方がまだ浮かばれそうだ。

「このマウス達って、一体いくらぐらいするんでしょうね」

Tを歪なFに変え、男はぼんやりと呟いた。

「確か無償提供だったと思うわ。ほら、代宮橋の駅の近くに動物園があるでしょう？ あそこから。写真なら…… ああ、これこれ」

「……うへえ、うかばれねえなこれ」

彼女が机の上から剥がした写真には、4歳ほどの少女がマウス動物園で言うモルモットを抱き上げて、これ以上無いほどの笑みを浮かべていた。その写真のモルモットには大きなマジックの矢印が向けられ、少女の顔を覆うように『13』という数字が書かれていた。

「こいつがあんな最期を迎えたとなると、この娘トラウマになりますよ……」

「そうね。だから私、科学者は成果だけ公表すればいいと思ってるの。私たちは責められる事も無いし、人々は何も知らずに享受すればいいだけ、お互い楽でしょう？」

軽く寒気を覚えるようなことを科学者は言っただけだ。

「日本 民主主義国家 でまかり通りますか、それ」

「日本 仲間内主義 だから通るのよ。それに、半端に情報を与えるのも問題よ。偉業一つの為に何万もの犠牲が出るなんてざら、科学の進歩による恩恵だって、一体どれほどの理不尽な犠牲で出来ているのやら。戦争無くして今の利便はありえない。そんな全てを知れば、正義だの愛だの言えなくなるわ。捻くれ者ばかりの世界ってのも、どうかと思うの」

人間的なのか機械的なのか、科学者はそう結論付けた。この科学

者がどういう人間なのか、男は時折分からなくなる。

「犠牲の上に成り立つもの……どつかで聞いたことのある話ですね」
「何処でもそんなお話はあるものよ。色んなものを生贄にした、最高の力を持つアーティファクトやエンパワーメント。魔法と言えばチープだけど、現実にもデルはあるものよ」

その言葉に、男はしばらく頭を巡らせる。確かに、そんな話はよくあるものだ。駆逐の果てに生まれた帝国、富を生み出す至高の石、使い手は皆、途方も無い力を手にして

「そういうのって、大方は破滅してますよね」

「勸善懲惡だからね、当然と言えば当然」

科学者は、それを物語の世界の法則だと言った。絶対的な力は、神ではない限り悪。倒し甲斐のあるものになる。それは物語としては当然のものだ。

しかしながら、現実において善とは勝利者のことであり、悪とは敗者であると男は認識している。つまりは、誰が善になるか悪になるかわからない。幾つもの死を生み出す科学者としては、不安である。

「俺たちも懲惡されたりするんですかね」

「それは無いんじゃない？ 受けるのは何時だって『使い手』だもの。活かすも殺すも奪うも与えるも、全部ゼーんぶ使い手次第なんだから。ティルヴィング、デュランダルを聖剣魔剣たらしめるのは何時だって彼らよ」

「……造り手の俺らに責任は無いってことですか？」

「私たち次第ね。科学を発展させること自体は犯罪じゃない。だから私たちは何時だってやりたい放題。それによって幾ら犠牲が生まれたとしても、法は罰してくれはしないわ。もしも罪を感じるのなら、あとは先人の行う通り。平和に走ったり、自殺したり」

呆れるように科学者は言う。彼女にとっては滑稽だったのだろう。自分の冒したこと重大さを考えられなかった人々の在り様が。

「……有名なのはアインシュタインでしたっけ。こんな世界にした

元凶とも言えますよね、大罪だ大罪」

「あんなに規模が大きいものを一概に罪とは言えないわ。現に、彼の功績は確実に善と呼ばれる部位にも浸透している。それに、私はあのお爺さんに感謝してるわ。私がこうやってこの机に腰を据えられるのも、彼の偉業があつてこそ。と言つても過言じゃないから」

「あー、そう言えばそうでした」

僅かに液体の残ったカップを置き、彼女はゆっくりと立ち上がった。パソコンの方へと向かい、モニターに移ったグラフを眺める。

「回したやつですか？」

「そうそう。あら、『こんな不気味なものは送ってくるな』だつてあの人たちももう少し自分の本分を理解して欲しいわ。まあ、やることやつてくれればいいんだけど」

彼女の指がキーボードの上で泳ぎ、モニター上に文字が打ち出されていく。

「宇室くん。前から聞こうと思つてただけど、なんで科学者になるうと思つたの？」

その脈絡の無い問いに、男はしばらく言葉を失つた。

「……意外ですね、興味あつたんですか」

「無いわけじゃないわ。それほど知りたいわけじゃなかったから、すぐに忘れてただけ」

科学者は手を休める事無くそう言つた。彼女の言う通り、特に気になるという訳でもないらしい。ただの話の繋ぎ目、それ以上の価値は無い。

とは言え、彼女が彼自身への疑問を口にしたのはこれが初めてだった。それ故、男は少しだけ真面目にその問いに答えることにした。「……なんか、なつてました」

その結果がこれである。簡潔且つ明確に話そうという学者の本分が、彼自身驚くほどにその言葉は短いものであつた。

「なるほど、貴方らしいと言えば貴方らしいわね」

それを理解して飲み込んでしまふしうしう辺り、彼女はやはり男の

上司である。

「一応、それなりの努力はしてきました。こーすればいい、あーすればいい。社会の理想的な定規に価値判断を任せてやってきてみれば、気付けばこんな奇妙なところに」

男は自分に呆れるように笑う。

「災難だったわね。ああいうのは自分と帳尻合わせしなきゃ役には立ってくれないものよ」

「仰る通りです。今になって、もう少し考えておくべきだったかな、と思ってますよ」

「あら、この環境は不満？」

「不満だの満足だの言ってられる場所じゃないですよここは。昔の自分の選択は俺がどうこう言えないくらい正しかった。ただ、流されていく自分がちよつと気に食わないだけです」

彼はこの職場を男を気に入っていた。それを口にするのも癪なので、男は敢えて言わないでおくことにした。

「そう、なら良いわ。不満だったらお給料を工面するように掛け合ってみただけど」

「不満です。……いやシカトですか」

科学者は完全放置で、モニターに意識を向けてしまった。

「せめて座ってやったらどうです」

「んー……」

心此処にあらず。どうやらスイッチが入ってしまったらしい。こうなると、終わるか歩くかしない限りは声は届かない。これ以上の会話は不可能だと察し、男はゆっくりと立ち上がった。

こういう時、男のやることは決まっている。自分の机の整頓と、食事の買出しである。食事の時間にしてはまだ早く、消去法で男の行動は決まった。それ程散らかっている訳でもないが、何となく棚に並べられた本を名前順に並べてみたりする。

基準はアルファベットだったり、数字化した合計だったり。この行為そのものには大した意味は無い。しかし、本を並べるとい

とは、今まで忘れかけていた書物に触れることを意味する。引越しの片づけ中に懐かしいものに出会い、ついつい手にとってしまうように、男の整頓は頭の仲の記憶を掻き立てるためのものでもあった。尤も、これは男が幼少から繰り返し返してきたことであり、男はこの行為の理由を既に忘れてしまっているが。

「……と」

そうして、何時も通りに気になる本を発見する。それは半年ほど前に購入した臨床心理学の入門書だった。気紛れで買った本ではあったが、純粋な理系だった男にはまだ興味をそそるものだった。これを上司に応用できないものかと、邪な心があったのは事実ではあるが、そんな期待は数分後に粉碎された。科学者は、男の興味を持つほとんどのことを網羅していたのだ。

おそらくは、いや、間違い無くこの眼鏡の助手が賢者と謳われる科学者を超越することは無い。それは男を含めた大方が確信していることだった。

それでも、それでも彼の好奇心が消えるわけではない。彼は手にとった本に、彼女ほどとはいかないまでも、集中し始めた。震動のような瞳の上下運動を繰り返し、大よそ十数秒でページを捲る。下手な本であれば30分ほどで読みきってしまったのは、この研究室に来てから身に付けた業である。

男の頭の中に、苗のような知識が植え付けられては断片的に消えていく。それを繰り返しながら、本の体系が少しずつ写本されていた。

それから十分ほどであろうか。不意に男は声を漏らした。男の注意はたちまち窓の外、研究所の入り口へと向けられた。

「なんだ……あれ」

研究所の前には、蟲のように人々が群がっていた。なんてわかりやすいのか、男は呆れたように口もちとを緩める。

彼らが掲げる旗に書かれている文字は『博愛』を謳う高尚な文章。どう見ても殺意か怨恨が込められている書体は頂けないが、それは何処かの愛護団体のデモであることは明白であった。

窓が防音仕様であったのは幸いだ。只の窓なら、何機ものメガホンが男の鼓膜を這い回ったことであろう。

「よし、と……。ん、何なのこの騒ぎ」

タイミングよく、科学者が手の動きを止める。

「今日は復活が早いんですね。デモみたいですよ、愛護団体の。まったく、危惧した途端にこれだ」

「……へえ。何か必然性を感じるわね」

「どうでしょう。俺、理系ですし」

彼女は窓から群衆を見下ろしていた。彼女は意図していないのだろうが、その姿から女王が民を見下している様を連想させずにはいられない。

「報復を受けるのは、使い手。でしたっけ」

「ええ、その通り。使い手は自らの掲げた在り様に全責任を負うのだからと言って、造り手にも在り様が零になるわけじゃないわ。私たちは只の造り手でしかないけど、その創造への姿勢に責任を負うことになるの。だから、苦悩する人間も居る」

「……なんか、さっき言ってたことと矛盾しません？」

「全然。さっきのは『罪』の話、今は『姿勢』の話。言い換えれば他者からの干渉と、自責の念よ。後者はさっき少しだけ触れたけど」

男はその言葉を上手く飲み込めなかったが、取り敢えずは矛盾は無いという点で納得した。

「それじゃあ、このデモはその俺たちの姿勢への報復ですか？」

「まさか、姿勢に対して報復なんて出来ないわ。思想の自由は日本では認められているんだから。と言うより、そもそもこれは報復じゃない」

「……？」

男は彼女の方へと振り向いた。彼女は相変わらず、対した抑揚も無

く民衆を見下ろしている。

「姿勢に対して報復が出来るとするなら、それはその姿勢が何らかの形となって害を生み出した場合だけよ。そして、このデモの方向性は動物愛護。彼らは自分達の意味を具現させる為に、現在を旧来に貶めようとしている。それは報復じゃなくて、侵略って言つの」

「侵略って、そりゃ幾らなんでも言いすぎじゃ……」

「そう？ 大方間違っていないと思うけど」

彼女には微塵の悪意も無い。それは彼女なりの客観視から出た答えだった。

「今も昔も、有意義な動物の殺害は認められてきているの。マウスだろうが、牛だろうが、鯨だろうが、犬だろうが、何なら人間だって……それはもう皆周知のこと。それが社会システムの在り方なの。様々な犠牲を容認して、その上で生命を享受する。人間を覆う生命のシステムがそうなっているんだから、当然と言えば当然よね。つまりは、それが本来の在り様なの。」

あのデモは一見、違反者を罰する、或いは止めようとしているように見えるけど、実際は真逆。旧来のシステムを否定しているの。

つまりは常識を塗り替えようとしている、侵略者よ。彼らは」

「『奪還』か『侵略』か、ですか」

「そんなところ」

常識に従っているように見えて、彼らは常識を破壊しようとしている。それは確かに矛盾することである。しかしながら、男は科学者の言葉を鵜呑みには出来なかった。

「けど、彼らにとっての根拠は恐らくは倫理です。別に、社会システムとか今まではどうかは考えてないように見えますよ。それに、彼らは民衆であって政治家じゃない。彼らにとっては、奪還なんですよ」

男が彼女の言葉にそんな返し方をするのは珍しい。科学者はしばらく男を見つめ、ふむと小さく声を漏らした。

「そう言えばそうね。確かに、彼らにとっての常識の基盤は倫理だ」

つとあ。……いけないわね、どうにも科学者やつてると道德とかを忘れちゃうみたい。私たちにとっては、自然の在り様こそが真実だから」

「科学者みんなが無道德みたいな言い方しないでくださいよ……」
男の言葉に彼女は謝るように舌を出した。

とは言ったものの、男も彼女側の人間である。彼女の言い分にも一理あると思っていた。何せ、倫理が生まれたのは数秒前の出来事なのだ。丸々一日、更にそれ以前をも支配していた自然の法則は、それを遥かに凌駕する。どちらが真理に近いのか、直感で言うなら言わずもがな自然である。生まれたばかりの倫理は未だに邪教の域。確かに、侵略だ。

「まあ、それでも彼らの行動は甚だ疑問ですけどね。俺たちの研究は、億を救える可能性があるっていうのに。その為の13、13万の犠牲なんて」

「殺さなくても出来るはずだ、が最近の流行よ」

「そりゃ都合の良い」

デモの声は更に大きくなり、時折防音硝子を超えてはつきりと聞こえるようになっていた。

「けど、少し妙ね。この研究所に対してこんなデモなんて来るの初めてじゃない」

「……ああ、言われてみれば確かに」

デモはどのような形であれ、必ず方向性が体制に左右される。ここ日本で言うならば資本主義がそれである、富の力である程度は変える事が出来る。

ここは国家と企業が力を注ぐ研究所である。化粧品会社と並ぶ力を持ち、この研究所の成果は国家の力になる。そんな所にデモの方向が向く前に、圧力と煽動によって適当な方に群衆の怒りが向くようになっていくはずなのだ。

「他国政府からって訳じゃなさそうね。マスメディアも聴衆も居ないところを見ると、どう見ても素人集団。となると、ただの感情主

義……実験映像がリークでもされたのかしら」

「参ったな、一番苦手なタイプです。あの手の人間は1+1を2だと認めませんし」

「私たちも含めて人はそういうものよ。感情在りきで行動の動機を論理立てて正当化するし。まあ、確かに『特に』算数の通じる相手ではないけどね。別にいいじゃない。どうせ私たちが相手するわけでもないし。可哀想なのは副所長が受付さん」

「いや、今日の食事どうするんですか。買出し行けないですよ」

「……なら中の食堂かレストランでいいんじゃない？」

「……ああ、そうか」

中の食事に飽きてしまい、男はここ数ヶ月ほど外食を繰り返していた。その内に、食事施設の存在を忘れていたらしい。

「それじゃあ、ちよつと用事済ませてきます」

男は頭を掻きながら、出口へと向かって行く。

「あら、どこ行くの？」

「ちよつと大富のところに。金をちよつと巻き上げてきます」

「また？ まったく、大富くんも少しはお金にすっかりするようになればいいのに」

「まあ、払うものは払わせてるんで、俺としても問題無いんですけど」

「ならいいんだけど。……ああ、そうだ。大富くんの所は六三よね」

「はあ、そうですね」

「それじゃあ、これお願い。矢幡さんにプレゼント」

そう言って科学者が棚から取り出したのは、妙に頑丈そうな小さなケースだった。

「なんですか、それ」

「昨日のやつよ」

「……あれか。俺になんか感染したりしませんよね」

「その辺は安心して、バッチリ閉じ込めてるし、感染力は遺伝子レベルで殺してあるから」

「うへ……そりやまあ」

不能にされた菌に同情する。時折、男にはこの科学者が真性のサデリストに見える事があるが、大方間違っではないのだろう。

男はケースを受け取り、目に映ったデモ集団を見て立ち止まる。

「何時まで続くんですかね、これ」

「さあ、食事前か、最長でも深夜前には帰るんじゃない？ それでも帰らないとしたら、只の無計画。デモ届を出してるかも怪しいわ」なら、問題無いかと男は安堵する。あんなのが居るところを帰宅するなんて恐ろしくて出来そうにない。

形相を変えて絶叫する不殺生主義者達、男にはそれが何となく人殺しに見えた。

「突然だけど宇室くん、貴方は今までいくら殺してきたの？」

科学者は不意に男にそう尋ねた。

「……一応、履歴書に傷は一切ありません。仮想空間では1000人は斬ったと思います。そういうことじゃないですよね？」

「そりやあね」

彼女は椅子に腰掛けて、90度ほど椅子を回した。

「生は死を前提に存在している。それは必ず死ぬということだけじゃなくて、他の生物の死によって生かされているということでもある。敵を殺し、獲物を殺し、そうやって生物は生きてきた。牙を持たない生物だって同じ、自分から直接殺さなくたって、死によって遺された物がいずれば糧となる」

それは誰だって知っている自然のサイクルであつた。食物連鎖のピラミッド、その頂点は最下層とつながり、幾度となく繰り返す永久機関となる。

「造り手だって、只造ることしかないんじゃない。自分以外から何かを受けた時点で、『使い手』、つまりは享受者になる。その受けたものは、必ず犠牲を孕んでいるの。」

私たちが享受している平和だって、どうしようもない腐敗と混乱を他の国に押し付けた結果に生まれたものよ。世界システムがピラ

ミッド式に機能するようになってから、当然と言えば当然よね。犠牲になった人間の数を享受者の数で割れば、一人辺りの殺害数がわかるんじゃないかしら」

男はそれに同意する。特に彼ら二人はそうである。彼らがこうしてここに居られるのは、人々の血税や出し惜しみされた貧国への援助金が回されているからに他ならない。孤児、貧者、病人、その他救えるはずだったものを見捨て、国家はここを援助する。間接的ながら、彼らは間違い無く虐殺者であった。

「今更な話だけど。食料であれ、剣であれ、力であれ、愛であれ、全てに犠牲は存在する。殺さずに何かをするなんて不可能なの。ただ何かを食べるだけで、体の中の幾つもの生命が死んでいく。今まで いえ、この数分でどれだけ殺したかもわからないわ。目には見えないし、隠されてはいるけど、私たちは死無くして生きてはいけない。」

……彼らは、一体何をしているのかしら」

そう言って、彼女は声する方向を見つめる。

その論理が微生物と人間の命を同等に見るという、人には受け入れ難いものであったとしても、彼女にとっては紛れも無い真理であった。

そして、畜生まで守ろうという群衆にとってもそれは真理で無ければならない。彼らが生きている限り何億と死んでいくというのに、誤差程度の犠牲に何を必死になるのか。彼女にとっては、彼らの行動は矛盾していた。

怒号が飛び、命を守ろうという崇高な理念を群衆は叫ぶ。

「……けど、それだと人を殺しても大した罪にはならないですよ。微生物を殺すのと一緒になんですから」

男が口にしたのは否定し難いパラドックスである。生物を殺すという日常的な罪は当然として零になる。それ故、他の生命と同値となった人の命の重さも限り無く零になる。

「あら、私は人を殺してはいけないと言った覚えはないけど」

それを彼女は、事も無げに受け入れた。

「……恐いな」

冷酷か、無慈悲か、男は彼女の眼に薄ら寒さを覚え、同時に口元を吊り上げた。恐らくは、それは好奇心か興奮からくる、笑みだったのだろう。

「まあ、だからと言って殺すつもりはないけどね。理由も無いし、趣味も無いから」

「……同感です。許可されたからって人を殺せるほど狂っちゃいません」

「殺せるようには狂っちゃいない、でしょ」

からかうようなその言葉に、男は溜息混じりの笑みを見せた。

彼女は再びモニターに向かい、何かを起動させる。男の目が正確に見ているのなら、ただのメールソフトだろう。話の終わりと受け取って、男は彼女に背を向けた。

「それじゃあ行って来ます」

「はい、いつてらっしゃい。……ああ、宇室くん。今日は帰る時にボディーガード付けた方がいいわよ。襲われるかもしれないし」

その言葉に、男は体を硬直させた。

「……深夜には奴等解散するんですね？ なら問題無いんじゃない」
「解散するから危ないの。散らばりやすいじゃない」

男はしばらく沈黙して、「ああ」と溜息を吐いた。

「何なら今日は帰っても構わないわよ。固まってる内が安全でしょうし」

予想外の計らいに、男は一瞬耳を疑ったが、彼女は本来それほど時間を気にする人間でもない。やることは特に無いから帰れというメッセージなのだろう。

「それもそうですね、それじゃあお言葉に甘えさせていただきます」
そう言って、男は研究室を後にした。

「って、ボディーガードって……、あいつらか」

男は頭の中で浮かんだ二人に深く溜息をついた。それでも、男にはそれしか選択肢は無い。多少頭は痛くなるが、背に腹は変えられない。そう納得せざるを得ないだろう。

それは科学が崇拜され、幻想伝承が廃れ始めた頃の話。

存在するもの　しないもの

コーヒーの香りやら何やらが芳しく漂う彼女専用研究室。うつかり倒せば一般人なら破綻しかねないほどの備品が並べられ、どここの映画だとも言いいたくなるような怪しげな書物が積み上げられていた。

窓は壁を額縁程度しか残さないほどに大きく、晴天の空より降り注ぐ日光をそのまま部屋へと注ぐ。

その部屋のやや隅、部屋の主は白に照らされる書物たちの陰で、音も立てずにキーボードを弾いていた。モニター上に、蟲のように文字が沸き、電子音が不定期に鳴らされる。その手は休むことなく手に膜でもあるのではないかと錯覚させるような残像を残す。しかも、4つのモニター全てが其々異なったプログラムを映しているから恐ろしい。

「……ホント、それどうやってるんですか？」

機械音以外は一切の無音であった部屋に、眼鏡の男の声が響いた。東洋系の顔立ちに、これ以上に無いぐらいに脱色された金髪。目つきの悪い垂れ眼に、やや痩せ気味の体。年は見た目で言うなら20代前半というところだろうか。

「て、聞こえちゃいないか」

彼の声に一切耳を傾けない彼女への視線を切る。彼は手にした食料品を机の上に乱雑に広げて、その中からベーコンフランスを手にとった。おもむろにそれを彼女の目の前でちらつかせたり、モニターを叩いた。男の予想通り、科学者は微動だにしない。

一体何時から続けているのか、下手すれば十数時間は経っているのかもしれない。男は鼻を鳴らし、大よそ二日と見積もった。

一度こうなった彼女を止める手段は無い、そう言っただけは無いだろう。モニターを布で覆っても、まるでその布が無いかのようには作業を続けるのである。集中力は既に人外。地震で研究室が倒壊

しても続けるだろうし、兵隊が乗り込んできたとしても、殺されるまで気付かないだろうと男は確信している。

そうなるとは一度は悪戯してやりたいと思うのが人の性だが、男は彼女に触ったことは一度も無い。理由は至って単純、単純に興味を持てない。この科学者に魅力が無いわけではない。尖った眼に整った顔立ち、豊かな胸にしなやかな足。露出が少ないとは言え、腕が伸びるには十分すぎた。しかし、何故か男はどこも反応しないのである。

「……不能じゃないよな？ 俺」

僅かな不安を覚えながら繁々と彼女を見つめる眼鏡の助手。しかし、彼が真つ当な男であることは先ほど証明済みであった為、不能の線は消えている。彼は割りと言真剣に、彼女がフェロモンを消すようなものを設置しているんじゃないかと考えた。

男はベーコンフランスをかじり、彼女の背後からモニターを覗き込む。同時に、「うわ」なんて間の抜けた声を上げた。

何時の間にこんなものに手を出していたのか。どう見てもそれは暗号コードだった。完全に専門外である男には解読しているのか構築しているのかわからなかったが、この科学者の幾何学っぷりに拍車がかかったことだけは理解できた。

彼女の多趣味、というより多分野に伸びる研究には男も舌を巻いていた。見境が無いというわけが無いが、他から見ればそれは知識欲に駆られるままに学問を貪っているようにも見えた。彼女の学ぶものから共通点を見出すとすれば、それら全てが学問だということである。当然と言えば当然であるが、それ以外に共通点が見出せない。

彼女曰く、「ニンジンばかり食べるのは兎以下」。

タン、と鳴るキーボード音。それを合図に彼女は音も立てずに立ち上がり、そのまま出口へと向かっていった。突然の出来事に、呆気にとられる男。

「……ちょ、いやいや、何ですかその不気味な行動は。背伸びとか息吐きとかしましょうよ！」

「……、ああ。なんだ、居たんだ宇室くん」

まるで寝起きのような落ちきったトーンで科学者はそう呟いた。本当に寝ていたんじゃないだろうかと思わせるまどろんだ眼に、助手は思わず眉を細める。無防備な顔つきに、少しだけ気が緩んだ。「ん、どうかした？」

「……いや、何でもないですよ」

男にはたまに彼女が子供のように見えることがあるが、彼女の非常識さが無垢と似た色をしているせいだろうと納得していた。彼は子供を好いているので、彼女のその表情に時折飲まれそうになってしまう。無論、恋愛感情などではなく親心であるが。

「それよりこれ。どうせ何も食べてないだろうと思って、食料調達してきました。好みがわからなかったから、栄養以外は適当ですけどね」

「構わないわ、どうせどれも似たり寄ったりでしょうし。死ななきや問題無い。ありがと」

「どう致しまして」

彼も人のことは言えないが、彼女はとても味に無関心だった。害が無ければ、大抵の物は口に入れてしまう。その神経は筋金入りで、カルチャーショックを受けるような場面で事も無げに異食を平らげ、外国のブレインに好印象をもたれたというエピソードまである。味に関心の無いから起こった出来事としては、ある意味皮肉かもしれない。

「ちょっとシャワー浴びてくる、二日は入ってないの」

「いつてらっしゃい。と言うか、一応女で美人なんですから、そういうところには気を遣ったらどうです？ 生き遅れますよ」

「遅れるも何も、もとかからトラックに立った覚えは無いわ」

「……ああ、そう言えばそうでした」

何て勿体無いのだらうと、彼の中の芸術を愛でる心は深く嘆いた。

真珠を酢に溶かすよりもひどい放棄だ。

「人は二物を与えられたら、片方をもてあましちゃうんですね」

「そうでもないわよ。矢幡さんなんてすごいじゃない。恋に研究に精力的に活動してるし」

「まあ、彼女は世間から見れば二物もんでしょうね」

尤も、男から見れば矢幡という女性はやさしさと能力を足して、ようやくこの科学者の能力に追いつく程度のものである。しかも、容姿の占めるウェイトの方が若干大きい。ただし、男の見解が正しいかどうかは兎も角、そのように二人を計るのは彼だけであつた。

「それじゃあ、私が上がるまでにそのブロッコリー、加熱してね」

「……気付いてましたか」

彼女が居なくなり、研究室の中は男一人だけとなつた。男は袋の中のブロッコリーを取り出して水で洗い、ラップで包んで一緒に電子レンジに入れる。

『宇室くん』

「うおッ!？」

突然の声に男は肩を大きく跳ねさせた。声の方向を振り向くと、そこには壁に埋め込まれた保護色のスピーカーが男の方を向いていてた。

『なに、なんか怪しいことでもしてたの?』

「いや、そういうわけじゃないですけど……。と言うか何ですかこれ」

『シャワー浴びてる時って暇じゃない? 頭で計算したり考えたり眠ったりするのも良いんだけど、どうせなら誰かと話したほうがいいかと思つて』

そんな理由でこんなものを設置したのか。筋は通っているような、しかし常識がずれているような。そんな微妙な奇行に男は呆れてしまった。

「まったく、こんなの何時置いたんですか?」

『1週間前ぐらいかしら。お願いしたら一晩でやってくれたわ。案外早くできるものね』

その一言の感想の裏に、一体何人の汗と血があつたのだろうか。最近の技術ならそれほど大掛かりな作業もいらないだろうが、完全に壁と同化しているスピーカーを見る辺り、かなり手が込んでいる。更に言えば、スピーカーは上下四方の計8箇所を設置されており、部屋を中心に立つと神の声でも聞いているような気分になった。さつきから聞こえる布の擦れる音すらも全方向から。まるで小人になってしまったようだ。

「ある意味浪漫か」

『何が?』

「いえ、何も。結構収音率いいんですね、これ」

『そりやもう、設定によつては鼓動なんかも聞けるらしいわ。……宇宙くん血圧低いわね』

「いやいや何ですかその特殊能力。恐いです止めてください」

どっかの鬼宜しく全てを見透かす科学者に寒気と羞恥を感じる。着ている服を破かれた錯覚がリアルだった。考えとかも見透かされそうで恐い。金属の擦れ会う高音の後、シャワーがバスタブを打ち鳴らした。

『そう言えば、この前のサンプルくんね、なんか脱走したみたい』

「は? ……あいつが?」

『そ、困ったわ。次見つかるのは何時になるのやら』

科学者はふうと小さく溜息を吐き、その内に男は彼女の言葉を頭の中で整理した。先週捕獲したサンプルの姿形を思い返し、科学者の言葉が事実であるという裏付けを探す。

「冗談でしょう……、あそこから逃げ出したなんて聞いたことありませんよ」

『それが出来ちゃうから生物って不思議よね。リミッターが外れると、とんでもない力を発揮するみたい。あの檻の欠陥部分は前に話したわよね? あれ、見つけられたみたい』

「……あれを？」

確かに、それなら納得出来ると男は思った。しかし、それでも逃げ出せた理由がまだ足りない。能力的にも、精神的にも。

「しっかりと操作してましたよね。興奮を極限まで抑えて、逃げる気なんて起こさないように」

『けど、操作の基準は十分に抑えられるはずの処置であって、抑えられる処置じゃないの。単に、あの子が予想を上回るほどの精神力を持っていたってだけのことよ』

スピーカー越しに、体を洗う音が聞こえた。

脱走という事実には矛盾はない。万が一ではあれ一は一、可能性としては十分の存在意義がある。それ故に男は驚愕の代詞として「信じられねえ」と呆れたように笑う。あれの精神力がそこまで凄まじいとなれば、考えられる理由はただ一つ。

「そんなに、あの宗教が良いんですかね」

それは男の、一番理解出来ないものであった。

『大元の教え。宗教っていうのは自らの存在の大部分を其処に置くのを前提にしているんだから、それに全てを懸けるっていうのも当然と言えば当然ね。簡単に取っ替え引っ換え出来るようなものじゃない、だからこそ強固なのよ』

「はあ、俺には理解出来ませんよ、宗教なんて」

男の言葉に、科学者は呆れるように溜息を吐いた。

「……なんですか」

『宇室くん、貴方は現実教の狂信者でしょ』

「っ」

科学者のその一言に、男は彼女の言いたいこと全てを理解した。

科学は事実とイコールではない。予測から事実への照合、事実から仮定の組立、科学のメスは様々な様式を取るが、それら全てには人間が介在している。人間が観測する以上、それは確実とはならないのだ。哲学者の言葉を借りるとするのなら、『疑う自己を除いて信じられるものは存在しない』。

つまりは確実にないことを存在するという前提で行動している以上、科学は事実を直視しているのではなく、『不確定なものの存在』を信じているに過ぎない。宗教との、明確な違いは存在しない。事実、今まで立てられた幾つもの科学法則は虚構として捨てられてきた。

「けど、少なくとも我々科学者には『結果』があります。それも現実的な」

『宗教にだってあるじゃない。宗教は信仰によって人に安息を与え、科学は人間の五感のシステムから安定する法則を導き出す。過程は違えど結果は同じ、どちらが現実的かしら』

そんなことを規定は出来ないと科学者は言う。

『宗教は心に根底を置く、科学は客体に根底を置く。科学が優れているとするのは傲慢だとは思わない？ 科学は人の発展を求める、その発展は人の欲求によるもの。そして欲求は人の心から生まれるもの。むしろ、宗教の方に分がありそうじゃない』

「しかし、宗教は政治の道具に……いや、それは科学も同じか」

『悲しい話よね。どんなに崇高でも高度でも、単純な物理的圧力には翻弄されてばかり。そうならない為の宗教ですら、今では資本主義の中で生きている。……あれ、シャンプーが無いわ。宇宙くん』

「わかりましたよ、今持っていきます」

『助かるわ。場所はわかる？』

「そりゃあ、貴方よか雑貨の位置は心得てますよ」

『流石』

男はPCのすぐ傍の棚から手早くシャンプー、それとリンスの詰まった容器と石鹸を取り出し、シャワールームへと向かった。

「それじゃあ、科学と宗教の違いって何ですか？ 対極じゃないしろ、違いはありますよね」

チンパンジーと二ホンザルの違い。男にとってはその程度の規模の質問だった。

「さあ、どちらも人間の思考回路を映し出したみたいなものだから、

神も仏も居ないってことぐらいじゃないかしら。神仏みたいな存在しないものを信じるのが宗教とも言えるかもしれないけど、数十年前はツチノコが動物図鑑に載ってたし」

「似たり寄ったりですか。てなると、崇めるっていうのがポイントですかね」

『んー、崇めるっていうのは敬うってことだから、それを宗教とするのはどうかしら。私、これでも敬われてるんだけど』

「学術論文 ファンレター すごいですもんね。それは置いといて、少なくとも科学に敬うっていうのはありませんよ。そういうのがあるとするなら、それは科学ではなく科学者にです」

『あー、それもそうね。主観だけで生きている人間と、客観だけで生きている人間が居ないみたいに、一人の中に二つが共存してて当然か。けど、それだと今度は科学が欠落したものの、みたいになっちゃうわね』

「それでいいんじゃないですか。敬うだの崇めるだの、儒教や倫理は時として邪魔になりますから。欠損でもありますが、摘出でもあります。まして、神だの仏だの、存在するかどうかもわからないものなんて、無視するに越したことはありません」

『相変わらず冷めてるわねー』

「貴方には言われたくないです」

彼女に比べれば、男は人間である。少なくとも、男はそう思っていた。

シャワールームに入ると、湯気が中を満たしていた。顔が少しずつ水に濡れていく。

そして、狙っているのか偶然なのか。バックライトが科学者の姿をベージュ色のカーテンに映し出していた。

「相変わらず良い体してますね」

「ボンキュッボン？」

「実能的を得た表現だと思います流石は賢者」

彼女をモデルにした像ならば、それを手掛けた彫刻家はオーギュ

スト宜しく時代の先駆者となるであらう。尤も、彼女がそれに時間を割くことなど考えられないが。

「それじゃあ、ここ置いときますよ」

「あと数歩ぐらい頑張ってくれてもいいんじゃない？」

「……数歩ぐらい頑張ってくださいよ」

「床が濡れてしまっじゃない」

どうせ湿っているんだから似たようなものだろうとも思ったが、これ以上何か言い返す気にもなれず、男は溜息を吐いてカーテンの中へと手を突っ込んだ。

「ありがとう。あら、気が利くのね」

「何度も往復するのは御免ですからね」

それだけ言っ、男はシャワールームから出て行っ。

「それで、さっきの続きの続きなんだけど、あれは間違いだと思うわ」

「あれっ、欠損で摘出っやつですか？」

「そっぢゃなくて、存在するかわからないものを無視するに越したことはないっ」

男は思わず、スピーカーの方に視線を向けた。

「……存在するかもしれない、てことですか？」

「そっぢゃなくて、存在しないものも存在するっ」

……。

しばらく、男は頭を傾げた。男は決して理解力が無いわけではないが、おそらくは彼女の言っていることは完全に男の管轄外である。「なぞなぞじゃないですよね？」

「勿論。とっても真面目な話よ」

そう言っと同時に、頭をシャワーの中に入れたのか、水の音が変わった。

「私たちは目にしたもののだけを信じるわけじゃない。口伝、書籍、あらゆるものから情報を手に入れて、中から事実を抽出する。知識情報革命が大よその輪郭を見せた今、私たちは世界中の地域からミ

クロからマクロまでの情報を手に入れられるようになったわ。けど、それは決して自分が目で確かめたものじゃない。私たちが信じてるものが、実は全くの嘘だったって可能性も十分にある。それは誰だってわかることでしょう？」

「そりゃあ。今日日、情報全てを鵜呑みにしてもいいなんて思ってる人間は居ませんよ。まあ、それでも知らず知らずの内に鵜呑みにしてしまっていますけど」

それは今も昔も変わらない。宗教であれ、科学であれ、事実であれ、事実が偽りかの対立は耐えたことが無い。

研究室の自分の棚へと向かい、男は本を並べ始めた。

『誤った情報を鵜呑みにするってことはね、それを事実として認識するってことなの。宇室くん、神様が存在するとしたら、どうなると思う？』

「随分アバウトな質問ですね……。最近のは現実と折り合いつけて、科学の未知の領域に世界を模造してますから……。天国があったり、神様が良いことした人を大事にしたり、ですかね」

『それじゃあ、今生きている人間 信者 は何をすると思う？』

「そりゃあ、天国に行けるように神に祈ったり、教会に行ったり、経典の導く通りに……」

男はそこまで言って、「ああ、なるほど」と納得した。

「神が居ようと居まいと、やってることは変わらないんですね」

『そういうこと。一神教や多神教が存在する以上、宗教のどれかは虚構を信仰していることになるわ。それでも、その宗教の信者達は存在していると信じて行動しているの。その結果、様々な文化や哲学、科学が誕生した。存在しないものが、確かに現実に影響を及ぼしたの。』

暗黒時代、キリスト教の真理性を証明する為にスコラ哲学が誕生した。それは論理的で現実的な研究を積み重ねて、キリスト教はその強力な論理武装で力を強大にするはずだった。けど、結果は「神は死んだ」。キリスト教の矛盾が指摘され、それが科学発祥のきつ

かけを生み出したの。神が居ようが居まいが、その道筋は通るわ。存在するかわからないものが、現実への道を開けてしまった」

「基、人間にはそれが全て。存在しないものが、確実にこの世界を造り出した。てな感じですか」

それはむしろ、目に見える事実より大きな貢献であつたであろう。『目にしたことのない事実、あるかもわからない虚構、その二つに明確な違いなんてあるのかしら。両者はどちらも私たちに直接的なものは与えないけど、どちらも確実に影響を与えているのに』

鉄の擦れあう音、同時に水音が消え去り、布の擦れる音が聞こえた。

「存在しないものも存在する、なるほどね」

『人間、ひよつとしたら動物も虚構を前提に存在しているかもしれない。夢や未来、自分の望みを頭に思い浮かべて、それを目指して走っていくんだから。それは科学の領域かもしれないわ。宇宙があるかもしれない、時は動かせるかもしれない、そういった予想や妄想が現実には帳尻を合わせて、科学になっていく。事実を求める科学が空想を起点にしてるっていうのも、妙な話よね』

「当然と言えば当然ですけどね。科学は宗教なんでしょう？」

『半分正解、科学と宗教は同じ型で出来てるの。その型の名前は人間、ひよつとしたら生物』

その言葉に、男は何故か小さく口元を緩める。彼本人にも、その理由はわからなかった。

と、突然研究室に聞き慣れたメロディが響き渡った。

「お客みたいですね」

男は受話器を手に取り、受付の人間と数言を交わす。手早く電話を切って、部屋の出口へと向かつて行つた。

「……………」

『誰？』

「上客です。あそこの室長」

『…………アポも無いなんて、何の用かしら』

「悪い内容じゃないでしょう。貴方に用だそうですし。それじゃあ、ちよつと相手してきます」

『流暢にね』

「わかつてますよ」

開きかけていた本を机に置いて、男は小さく伸びをする。時刻は2時を過ぎ、既に昼食の時間からは大きく外れていた。昼食に若干の名残惜しさを感じながらも、手早く接客の支度を整える。頭の中では受け答えの練習と、話すであろう内容の予測。この範疇で済めばいいのだが、と男は溜息を吐いた。

そんな思考の中にノイズが走る。それは、逃げ出したあの男のこ
と。

「……あの男と俺たち、信じるものの価値はどちらが上なんでしょうかね」

『さあ、価値なんて人それぞれ。とは言え、社会的基準で言うなら私たちの方が上でしょうね。数十年、百年後はわからないけど』

「……どういことですか？」

『今の世界で、富の中心はお金でしょう？ その上では、私たちの科学の方が、彼の信じる宗教よりも価値があることなの。お金になるからね。尤も、不謹慎だけど宗教だって稼げる潜在性はあるわ。けど、どちらかと言えば彼の立ち位置は搾取される側。だから、今の世界では私たちの方が上。』

けど、知ってる？ そういう分野の最先端の研究者はね、将来、富の価値がお金じゃなくて、宗教的自己実現になるって言ってるのよ』

「うへ。それって本当に研究者ですか？」

『さあ、どうかしら。けど、一理あると思うわ。確かに、本来はそこに根本を置くべきかもしれないから。お金なんて只の物に価値があるなんて、見方によっては異常事態よ』

確かに、どっちもどっちかと男は皮肉を感じながら笑った。

『宇宙は誕生と破壊を繰り返すっていうのが現代科学の最有力だけ

ど、それは数千年前に仏教が唱えていた。案外、アカシックレコードを読み解くのは、宗教の方が早いのかもね』

そう言う科学者 現実主義者 は、やはり現実主義者 科学者 なのだろう。男は彼女の言葉がそう察した。彼女がいくら虚構を現実として見ようが、結局それは観察であり、冷たい科学の所業であった。男よりも、ずっと「冷めている」。

「それじゃあ、10分ほど粘るので、それまでに着替えておいて下さいね。それ以上は全裸であろうが何であろうが貴方の前に連れってきますので」

『それはいけないわ、国際問題じゃない。15分頑張つて』

「……努力します」

それだけ言つて、男はその場から姿を消した。

それは科学が崇拜され、幻想伝承が廃れ始めた頃の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7789f/>

イミテシオ・カンタリベ

2010年10月28日03時32分発行